河川敷幻想

笹木　均虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
河川敷幻想

【Ｎコード】
Ｎ３０５１ＢＡ

【作者名】
笹木　均虫

【あらすじ】
崩壊したテキスポからの脱出です。ｍｉｘｉの超短編でもきんのハンドルで載せています。
ちょっと有り得ない不思議な物語の掌編集となります。

月とゴミ

その流れ星は沢山で
それはそれは沢山で
でも誰にも見られずに
通り過ぎてしまいました。

その夜は、雲が流れる様に飛び、雨が降ったり止んだりを繰り返していて、晴れ間が見えたと思うとすぐに雲が空を覆う繰り返しで、随分前からテレビで報道していた沢山の流れ星は見られそうに無かった。その流れ星は地球の傍を通る沢山の塵芥の様な宇宙塵の集まりが落ちて来たもので、余りにも小さくて大気圏で燃えつきしまう程に小さい物であるとの事だった。もし晴れていれば、きっとその有様はあの有名なトリフィドの時代というＳＦの冒頭を思わせるかのような、前例の無いような天体ショーになる予定だった。しかし僕の目に映るものは、流星の雨ではなくて、正真正銘の水の雨だった。

そんなものだから、僕は深いため息を付き、夜長をゆっくりとお茶を飲んで過ごした。流れ星が見えた時に唱えようと考えていた願い事もすっかり頭の中から消去し、その代わりに漫画本を開き、饅頭をいくつも口に放り込んだ。その漫画が面白くて、ついついお茶も飲み過ぎたので、どうしてもトイレに立つ回数が多くなった。日付けが替わり、雨がようやく止んだ頃にトイレに立つと外でガソゴソと音がするので、僕は、この小さな河川敷の町に時折出没するという兄弟狸がやってきたのかな？と思い、そうならば流星群の代わりに見てみようと、脅かさない様にそっとアパートのドアを開けて外に出てみた。するとアパートの脇にある共同のゴミ集積場の前では、お月さんがゴミ袋を収集場所に置いて上からカラス避けのネッ

トを被せている所だった。最近、深夜にゴミを出すと大家さんから五月蝿く叱られるので、「夜に捨てちゃ、だめだよ」と僕が注意すると、お月さんは飛び上がって驚き、そのまま雲の切れ間へ飛んで逃げ帰ってしまった。そして、あたかもずっとそこにいたかのように、雲の隙間でそっぽに向いてから雲の中に隠れてもう出てこなかった。まぁいいか、人のゴミだし放っておこうと部屋に戻ってからやっと床についた。

翌朝、ゴミ収集車がひとつのゴミ袋を残して去って行った。袋には注意書きのシールも貼ってあった。なんでだろう？と思って近づいてみると袋は破け、中から黒い石がごろごろ顔を出していた。そのうち一個をそっと手にとってみると大きさの割りにとても重い。見れば見る程にそれは隕鉄らしかった。どうやら、お月さんは昨晩自分の所に落ちてきた物をわざわざここに捨てに来たらしかった。

僕は珍しいものだし、手ごろな大きさの隕鉄を持って部屋に飾って置くことにしたが、とてもその黒いものに何かをお願いをする気にはなれなかった。しかし、その晩に沢山の流れ星が空中を飛び交っている夢を見た。その中で僕はただ何も考えずにうっとりと空を見ていた。たとえ夢の中でも久々に見る夜の空だった。

ビールを飲みながら

クーラーも無い部屋は夜になってもとんでもない暑さだっし、じめじめとした風が開けた窓からどろんと入ってくる。じっとしても汗がじわりと出てきた。「あれまあ」とお月さんは僕の部屋でビールを飲みながら小さく叫んだ。「なんでゴミを飾っておくんだい？」それは、以前お月さんが僕のアパートのゴミ捨て場に捨てていった隕鉄の一つだった。沢山あったけど、形が良さそうなものだけとっておいて、あとは近くにある河川敷に捨ててしまったのだ。

「ん？ちょっと珍しいからね。」僕は、きんきんに冷えたキュウリに塩を軽くまぶして口に放り込んだ。瓜らしい香りが爽やかだ。

「へぇ、欲しければ幾らでもあげるけど」お月さん空を指して言った。本来ならそこに居る場所だが、曇っていて誰にも見られない事を言いことに職場放棄をしているのだ。

「いや、これ一個あればいいよ」と僕は断った。月にある隕石とか隕鉄などごっそり持ってこられてはたまったものじゃない。何かで読んだが月の裏側は月が地球の周りを回り初めて以来の隕石がある筈だ。

「ふーん、要らないのかい」お月さんはビールをぐびぐびと飲んだ。

「どっさりあるのにさ」

「それより、こっちに隕鉄とか捨てちゃダメだよ。あれ、燃えないからさぁ」

「燃えないゴミの日もあるだろ」お月さんは、してやったりという満面の笑顔で言った。

「もう」僕は、役所の清掃局から渡されたゴミの分別表を台所の壁から剥がしてお月さんに見せた。そこには、分別して出すべきゴミの種類が一覧で書いてあった。

「隕石も、隕鉄もここに書いてないだろう？」僕は分別表を指で指しながら言った。

「じゃ、あれはどこに捨てるんだよ」
お月さんは、僕が飾っておいた隕鉄を目で指した。
「太陽にでも捨てたら？」僕は、それが一番もっともらしい考えと思った。どうせ太陽の芯は重い鉄とかで一杯の筈だし
「いや、あいつ意地が悪いんだよ」とお月さんは、こそこそと言った。まるで夜の夜中に太陽に聞かれるのが怖いみたいだ。
「昔さぁ、でかい奴が落ちてな」お月さんは両手を大きく広げてみせた。
「まぁ、痛いのなんのって。そこで太陽にお願いして、あの熱々の溶鉱炉に放り投げたんだ。でも、あいつそれが届く前に横に避けやがってさ」
まっすぐ投げても、お月さんも太陽も動いているからそう簡単に当たるとは思えないと言うのは止めた。
「でな、面白いことにそのゴミがさぁ太陽の周りを半周してから、速度を上げやがってね」お月さんは、ふっと言葉を止めた
「これ誰にも言うなよ」
「うん」と僕は返事をした
「この地球に当たってしもうた」
「それって、最近？」
「いやぁ、もうかれこれ６５００万年前かなぁ」お月さんは、缶ビールをもう一缶飲んだ。
「しかし、このビールってやつはいいよねこうも暑いと、たまらんよ」お月さんは、ジュラシックパークって昔の映画の題名が書かれた下敷きで顔を扇ぎながら言った。
「しかし考えてみればあの頃の地球も結構暑かったけれど、俺のおかげで暫く涼しくなったのさ」
「いや、涼しいというより極寒になったのじゃないか？」

秋刀魚の味

夏の恋が秋に終焉を迎えるのは
別に珍しいことじゃない
涙が流れるのは秋刀魚の煙のせいだし
毎日秋刀魚を食べているのは
夏の間に貴女に貢ぎすぎたからじゃない

太陽がすっかり沈んだ夕暮れの河原にひとつの七輪を置いて、のんびりと炭を熾しているとの河川敷の遊歩道を犬を連れた人々が珍しそうに僕を見て通り過ぎて行った。湿気った炭は、時折爆ぜて小さい火の粉をパチンと言う音と共に宙に舞い上げた。「腹減ったなぁ」と僕は独り言を言いながら、団扇で風を七輪に送り続けた。準備が遅れたというか、近所のスーパーで安い秋刀魚がタイムサービスで更に安くなるのを狙っていたので、こんな時間になってしまったのだ。

やがて火の威勢良くなった処で僕は、塩をふっておいた秋刀魚を金網に置いた。湿った秋刀魚がじゅうと言う音を立てた。そこで更に団扇で風を送って火勢を上げると、やがてぼっ！！ぼっ！！と脂が燃えて炎となって立ち上がった。そして当然の様に、香ばしい香りとむせ返るような煙が立ち昇った。これこそ秋刀魚の醍醐味。安いと言っても今年の秋刀魚はまるまると太っていて、当然脂も乗っている。あがる煙の量も半端なものじゃない、僕は時折変わる風向きにまともに煙を浴びせられては涙を流した。そして涙を、袖で拭き終わってから顔を上げると煙の向こうにお月さんが立っていた。

「畜生！！なんだ今日は、やたら煙くてしょうがねぇと思ったらお前かい」とべらんめぇ調で腕組みをしながら僕を見下ろしていた。

「まぁ、家だけじゃないだろうねぇ」と言って立ち上がって当たりを見回せば、秋の夜空の中をうっすらとした煙があちこちから漂

っているようだった。そしてまた、しゃがんで団扇を動かした。すると煙がまともにお月さんにかかったものだから、「この野郎」と言いながらお月さんは脇に飛びのいた。まぁまぁ不可抗力だってばと言うと、怒るお月さんはそれでも許してくれそうに無いので「まぁ、まぁ、僕の部屋で一杯やっていなよ、後で秋刀魚も肴にするからさ」と食べ物で懐柔した。すると、「秋刀魚は要らないが、ビールは欲しいな」とお月さんは、ニコニコして僕のアパートの方に歩いて行った。勝手知ったる他人の家というがこいつにはビールを隠しおおせる場所がないから放っておけば勝手に飲んでいるだろう。しかしビールとは言え、本当は酒税法の安いやつだけど。

この秋刀魚が焼けると、既に3枚に下ろしておいた別の刺身用の秋刀魚をクーラーボックスから出して、トーチで皮の方にさーっと焼き目を入れた。これまた、脂でパチパチっと小さな火の子が立つのがなんとも可愛い。僕は秋刀魚のタタキとか勝手に呼んでいるが、これが脂っこい秋刀魚の刺身にだけに、脂が丁度よい塩梅に溶けてくれるのでトロみたいになるのだ。

お月さんは、もう2缶もビールを飲んでいた。冷蔵庫にあった豆腐が冷奴になって勝手に食べられていた。しかも茗荷までちゃんと切って乗せているのがなんとも憎たらしい。熱いうちが一番美味い秋刀魚を長皿に盛りつけその脇には、大根おろしを軽く絞ってから山形にして置いた。そして、叩きは刺身の様にきちんと切って盛り付けて、上からざっと生姜醤油をかけた。

「煙くなってまで、そんなもの食べたいのかねー」お月さんは、焼きさんまに箸を伸ばして身がするりと骨から剥がれるのに驚いた。おやおやこれは具合がいいな。

「脂が乗っているからねぇ身離れもいいのさ」そして、口に入れてビールを飲んだ。何も言わずに、また一切れ秋刀魚を箸でつまんだ。そしてまた、飲んだ。

「ふむふむ、、まぁ不味くは無いじゃないか」と秋刀魚の肝をつまんでそれを口にして「おぅ苦いなぁ、でも美味しいぞ」とまたビールを飲んだ。
「こうなってくると、冷酒も欲しいね」お月さんは、じっと僕の顔を物ほしそうに見つめた。
「冷蔵庫は満杯、でも懐はからっぽでさ」僕は、首を振った。
「だから、残念なことに冷酒はないよ」ビールを飲みながら、秋刀魚はすっかり二人の腹に収まってしまい、秋刀魚の骨までしゃぶりながらお月さんは、名残を惜しんだ。
「ふむ、もう終わりかぁ」お月さんは、腕を組んだ。「もっと、食べたいな」
「もう家には無いよ」食べる物なら冷蔵庫にまだたくさんあるけど、秋刀魚は余分に買っていない。
「分かっているけど、美味しかったなあ。」お月さんは、まだ名残り惜しそうだった。そして骨と頭だけになった秋刀魚をしみじみと眺めながらつぶやいた。
「そういや海を照らせばこの魚は結構見るよなぁ」お月さんは、何か考えてから腰をあげた。
「ふむ、そうすれば焼けるかな」と小さくつぶやいて、ご馳走さまと言ってからそうっと秋風の通る窓から出て行った。
　唐突に静かになった僕の部屋を、秋の満月が静かに照らした。僕はお月さんに見えるようにクーラーボックスから冷酒を取り出してガラスのグラスに注いだ。どこかから「嘘つき！」という言葉が聞こえたが、無視してぐいっとそれを飲んだ。不意に忘れるつもりでいた名前と涙が出そうになって、それを酒でぐいと押し戻した。今日の夜長は、酔わないと寝れないみたいだったのさ。それをお月さんに飲まれたら辛い夜になってしまう。

　暫くして、月で噴火の様な現象が見られる現象が続いた。ニュース映像では月のどこかからか煙の様な物が靡いていたようであるが、

いや、まさかねと思いながら、僕はまた食卓を占領している秋刀魚とニュースの映像を交互にみていた。

芹之栄

それは僕の目からすれば上等な芹だった。根がしっかりついているし何より新鮮だ。ただ、それを僕の家に持ってきた少女は尻尾を生やしているし鼻の横には長い４本の髭が左右に伸びていたから、どう見ても若い狸が化けそこなったとしか思えなかった。

「昼間、野川で見ていたの？」僕は、芹を眺めながら訊いた。すると少女狸はうなずいてみせた。

野川は家から離れた所にある小さな河川だが、余り人の手が入っていないので今でも周囲には多くの草花が生えているし、実を成す木も多い。特に今頃の芹なんかは、柔らかいし香りもいい、だから僕は何時ものように錆びた自転車で目的の場所まで行くと川岸まで降りて食べる分だけの芹を摘んだ。その途端いきなり上の方から女性の怒鳴り声が聞こえた。

「何をしているんですか！」

「え？」僕はあっけにとられて、声の方を見た。すると僕が止めた自転車の横で腕になにやら腕章らしいものを付けた女性が僕に向かって指を刺していた。「直ぐに出ていってください。」こうも高飛車に言われるとなにか悪いことをしたのだろうと考えざるを得ないので僕は手にした芹を置いて上に上がった。「ここで芹を採ったら駄目ですか？」僕は女性に訊いた。

「そうですとも、野川の自然を荒らさないでください」と女性は腕章を僕に見せようとしたが、良く見えなかった。いや見る気さえなかった。

「そうですか」と引き下がって自転車にまたがるとすごすごと帰ってきたのだ。

その野川の芹が僕の手の中にあった。

「ありがとう、よかったら鍋でも食べるかい？」と少女に訊くと小さくうなずいてみせた。

「じゃああと2時間くらいしたらまたおいで」少女はまたうなずいて何処かに行ってしまった。

その時は丁度ご飯が炊き上がったところだったので、僕はそれをピンポン玉くらいの大きさにまるめると、網でじんわりと焼いた。だまこ餅とか、山餅とか言われる類のものだ。それから、ごぼうを削ぎ切りにして、葱を斜に切り、芹の根はきちんと洗って根も食べることが出来るようにした上で根と葉を切り分ける。ただ切っていると、唐突に昼の記憶がまた湧き出てきた。守るだって？芹はあの小川の岸沿いに延々と生えているし、年に何回かは除草作業のため一切合財岸に生えている草はすべて刈られてしまうというのにだ。希少な種を守る為にそういう活動なら分かる、しかし本来どこにでもある物だとどうなんだろう？むしろ食べたり、遊び道具とかにしてより身近な存在にすれば、雑草とか言わずに名前も覚えるし、より自然に親しみを覚えるのじゃないものかなとなにやら怒りさえも覚えだした。

そろそろ狸が来る頃を見計らって鍋にはスーパーで買った比内鳥スープを入れて煮立てて待った。しかし時間になっても狸は来ず、獣だけに時間にはルーズなのかなと思い、一時間だけ待ってから僕は鍋に鶏肉と野菜と豆腐と放り込んだ。だまこ餅は食べる直前に入れないと煮崩れるからそれは一番最後だ。

熱燗を飲み、狸はどうしたのかなと思いながら鍋を食った。そもそも量が多いので、僕のおなかは狸の置物のようにぱんぱんに膨らんだ。それでも未だ鍋には具が残っていた。二人分としても作り過ぎたみたいだ。

翌日、どんよりとした雲が覆う中、狸はどうしたのかなと自転車で野川に向かうと途中の県道の道端に狸の死骸がつぶれたまま放置されていた。それがあの少女狸かどうかは分からなかったが、僕は一旦家に戻って昨日の残りのだまこ餅を一個だけ狸の横に添えた。

雪がちらちらと舞い降りはじめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3051ba/

河川敷幻想

2012年1月14日01時46分発行